

特集にあたって

栗山健一*

精神・神経疾患には高率に睡眠障害が併存する。過眠は不眠症状に比し、注目されることの少ない睡眠関連症状であるが、遭遇頻度は決して稀ではなく、患者の日常生活・社会機能を低下させる重要な臨床症候である。しかし、過眠の背景病態評価に関するコンセンサスが乏しく、過眠に対する治療手段が限られることから、適切な診断・治療方針を導き出すことに難渋する場合が多い。

近年、神経発達症に関連する過眠症状に注目が集まっている。しかし、同じ神経発達症診断カテゴリにある注意欠如・多動症と自閉スペクトラム症においても、疾患間で過眠の背景病態が異なり、適切な治療アプローチが異なる可能性が指摘されている。他の精神疾患においても、併存する過眠症状は原疾患の病態・治療と関連して生じることも多く、さまざまな場面において患者の日常生活・社会機能の障害要因となる。このため、精神・神経疾患に併存する過眠の診療においては、原疾患の病態特性や二次的に過眠を生じうる睡眠障害の併存特性を含めた背景疾患ごとの病態理解が必要である。

本特集は、さまざまな精神・神経疾患に併存する過眠症状に焦点を当て、原疾患との連続性および背景病態、併存睡眠障害などを整理し、適切な治療法を導き出すヒントを提供する。各テーマをご担当いただいた執筆者は皆、各々の領域における本邦のトップランナーばかりであり、最先端の研究成果ならびに、臨床経験に基づいた示唆に富む見解・提案をご提示いただき、充実した内容に仕上げる事ができた。この場をお借りして御礼申し上げたい。本特集テーマには、コンセンサスの確立に至らない領域も含まれており、さまざまな視点・考え方が存在しうることをご了承いただいた上で、臨床推論を深めるためにご活用いただければ幸いである。

精神医学と睡眠医学は密接に関連する近接分野であるが、過眠は最も診断・評価が難しく、診断・治療において両医学領域からの総力を挙げたアプローチが必要な症候であると言っても過言ではない。

* 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所睡眠・覚醒障害研究部 (〒187-0031 東京都小平市小川東町 4-1-1)